

中学校・高等学校におけるがん教育の効果的な指導

湊 隆太郎 (愛媛大学 大学院)

1) 目的

本研究の目的は、保健の授業やがん教育の実態調査を踏まえて授業構想し、中学校・高等学校での実践を通して、中学校・高等学校におけるがん教育の効果的な指導について考察することである。

2) 研究方法

研究① 保健の授業及びがんの学習の実態把握

- 1) 対象者：E大学に所属する92名の大学生
- 2) 調査方法：質問紙調査

研究② がん教育に対する不安や悩み

- 1) 対象者：愛媛県内の中学校・高等学校に勤める保健体育科教諭4名
- 2) 調査方法：面接調査（半構造化面接法）

研究③ 授業実践（中学校・高等学校）

- 1) 対象者
 - ・E中学校第2学年の4クラス（119名）
 - ・E高等学校第1学年の3クラス（115名）
- 2) 調査方法：授業前後の質問紙調査

3) 結果と考察

研究① 保健の授業及びがんの学習の実態把握

中学校・高等学校ともに、保健の授業は「知識の暗記が中心だった」という質問に「はい」と回答している割合が80%を超えていたり、「教師との対話を重視した授業であった」という質問に「はい」と回答している割合が30%以下であったりしたことから、知識伝達の授業となっている実態が確認できた。

また、がんの知識の理解状況については、新学習指導要領で示されている内容については、正答率が低い実態（40.6%）を確認できた。

研究② がん教育に対する不安や悩み

教師の不安や悩みとしては、「自分自身のがんに対する知識不足」などがあげられた。

生徒に考えられる不安や悩みとしては、「自分事

として捉えることができない」などがあげられた。教材への不安や悩みとしては、「活用方法がわからない」などがあげられた。

その他については、「授業時数や取り扱う教科」などが不安や悩みとしてあげられた。

研究③ 授業実践（中学校・高等学校）

授業を構想するにあたって、「生徒自身に、がんを自分事として捉え、興味・関心を持たせること」、「教師や他者と対話する場面を積極的に取り入れること」、「文部科学省や教育委員会の出している教材を活用すること」の3つの点に留意した。

授業の評価から、生徒のがんについての興味・関心が高まったことが分かった。また、「がんの授業では教科書以外にも豊富な資料があった」という質問に「はい」と回答している割合が90%以上であったことから、文部科学省や教育委員会の出している教材の活用方法の一例を示すことができたと考える。対話する方法については、改善の余地があった。

4) 結論

本研究では、がん教育の効果的な指導に向けて、次の2つのことが重要であることが分かった。

「がん」については、まずは教師が正しい知識を身に付け、教えることが求められる。また、「がん」を身近に感じることができるような導入を工夫することで、生徒の意識が肯定的に変容することや興味を持つことにつながると考えられる。

「指導方法」については、「教師や他者と対話する場面や活動を取り入れること」や「ICT 機器を有効的に活用すること」が求められる。

5) 主な参考文献

- 1) 植田誠治・物部博文・杉崎弘周, 学校におけるがん教育の進め方の考え方, 大修館書店, 2020.